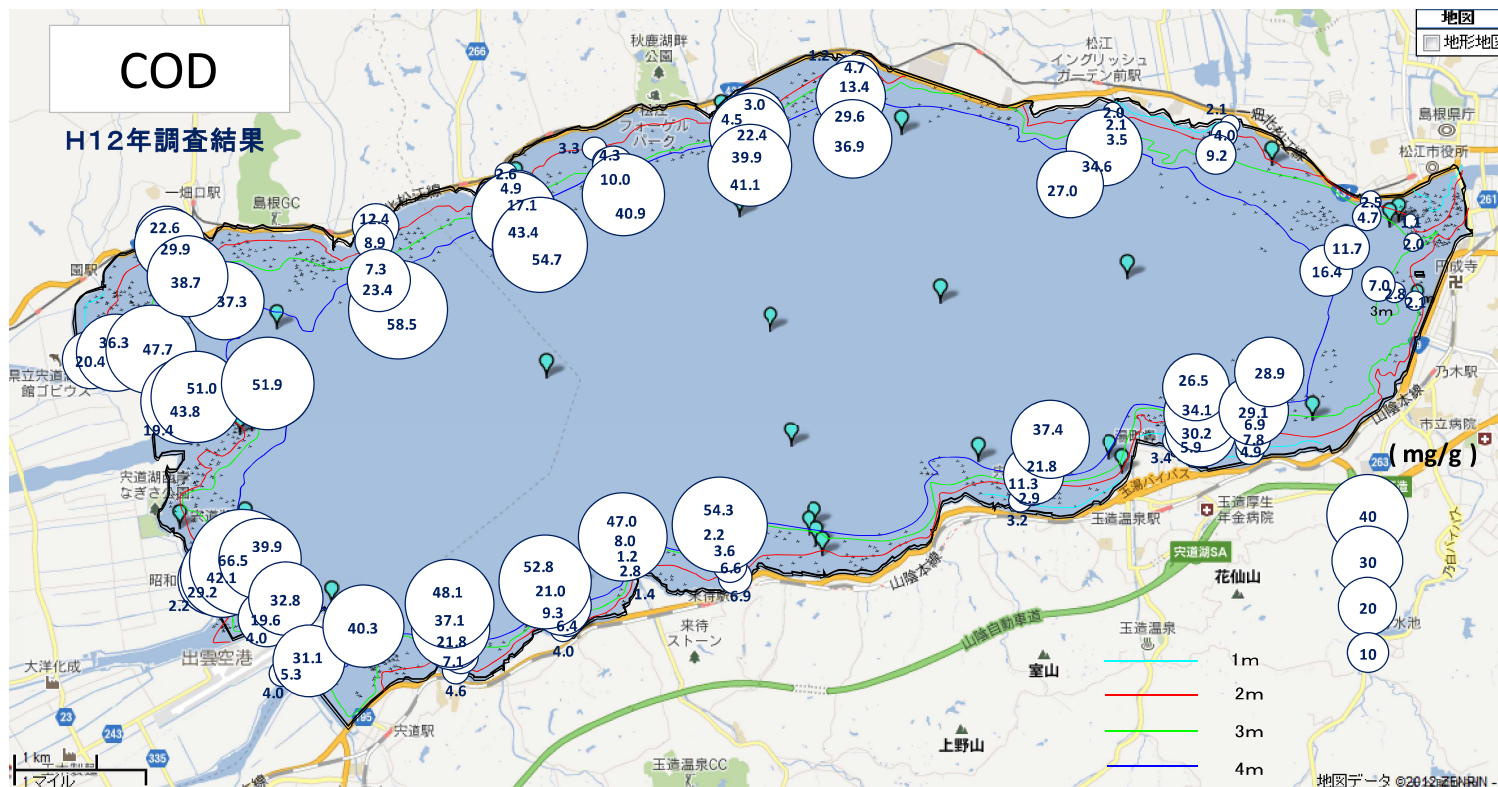
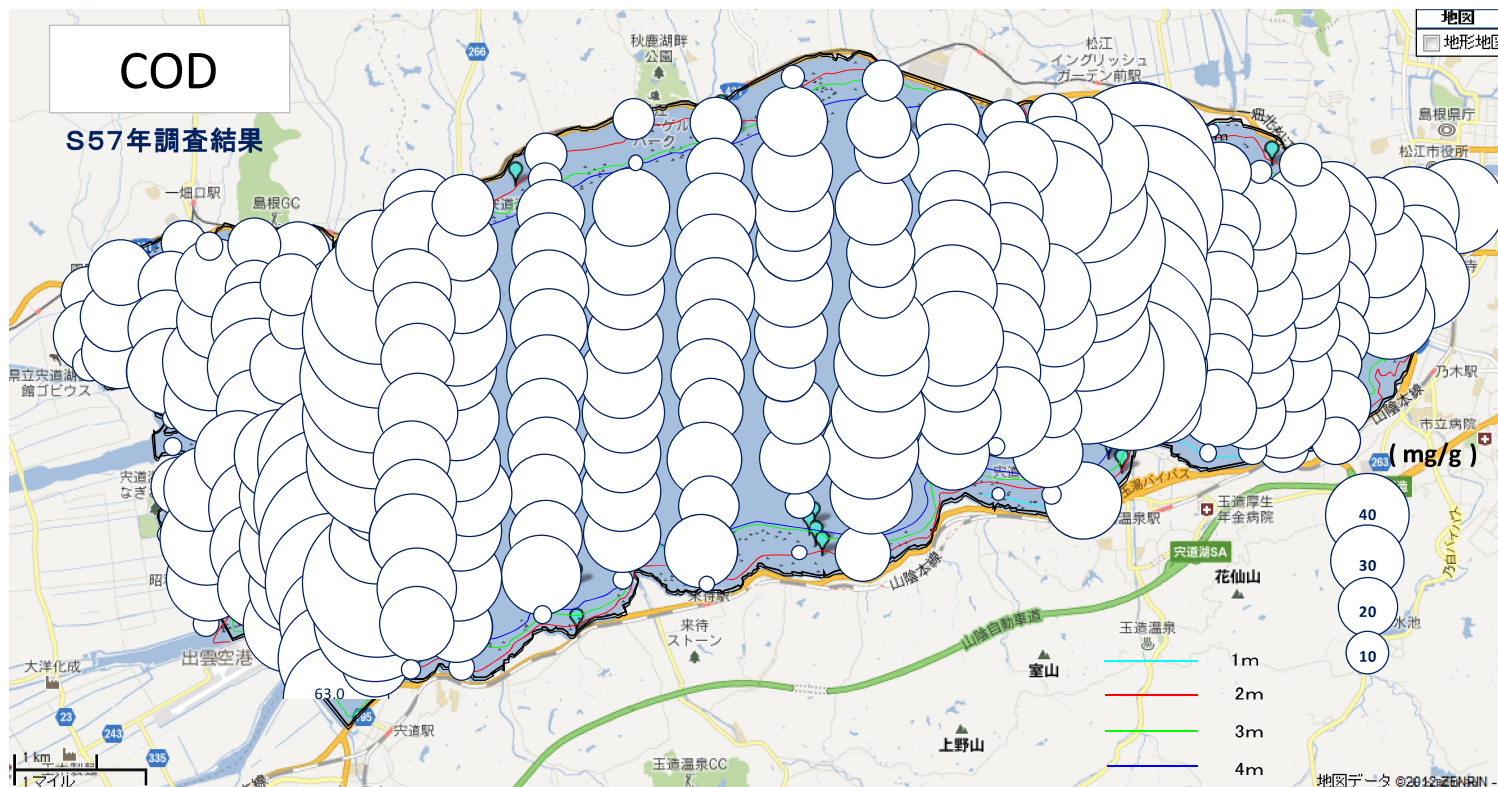
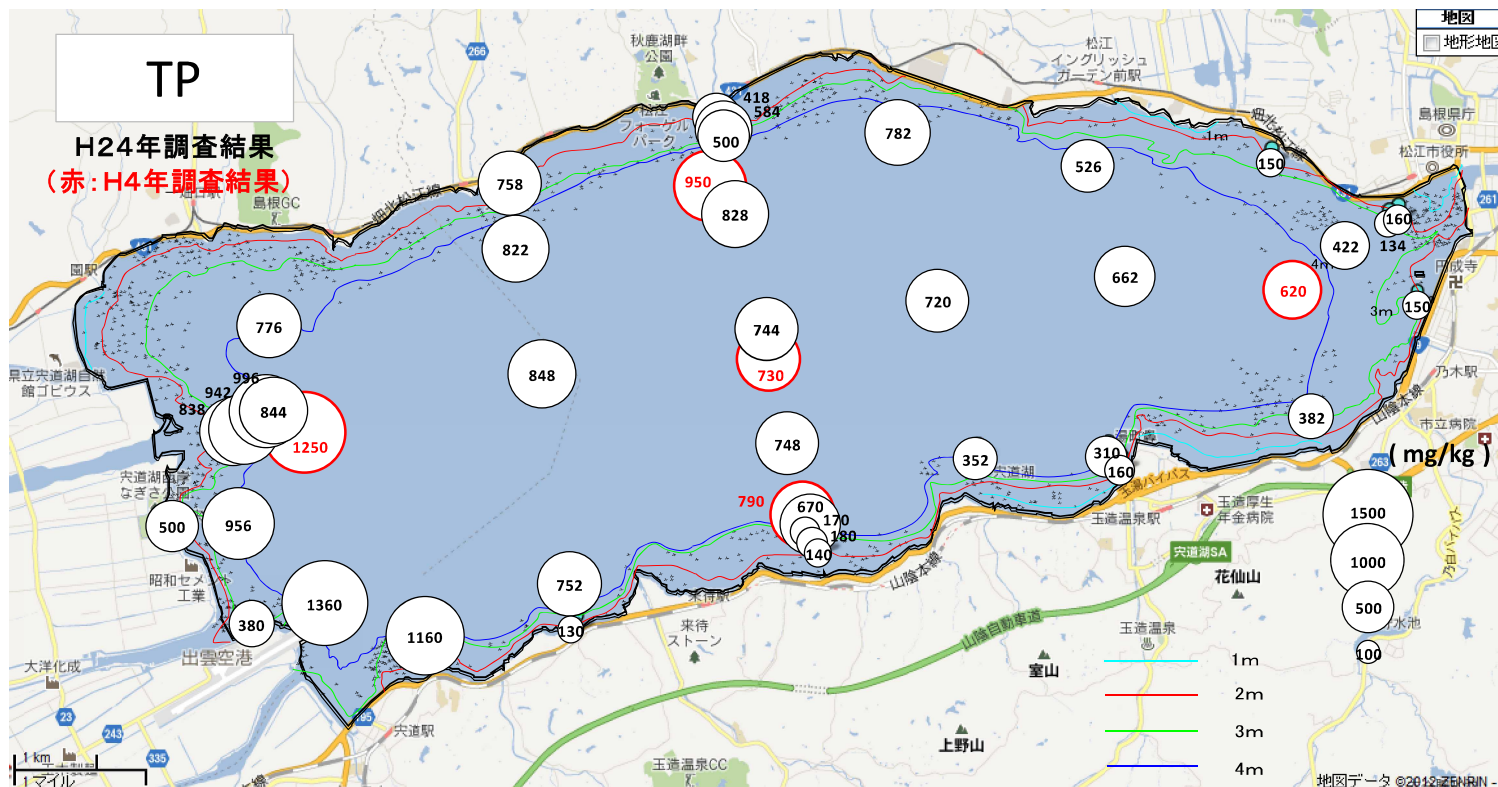
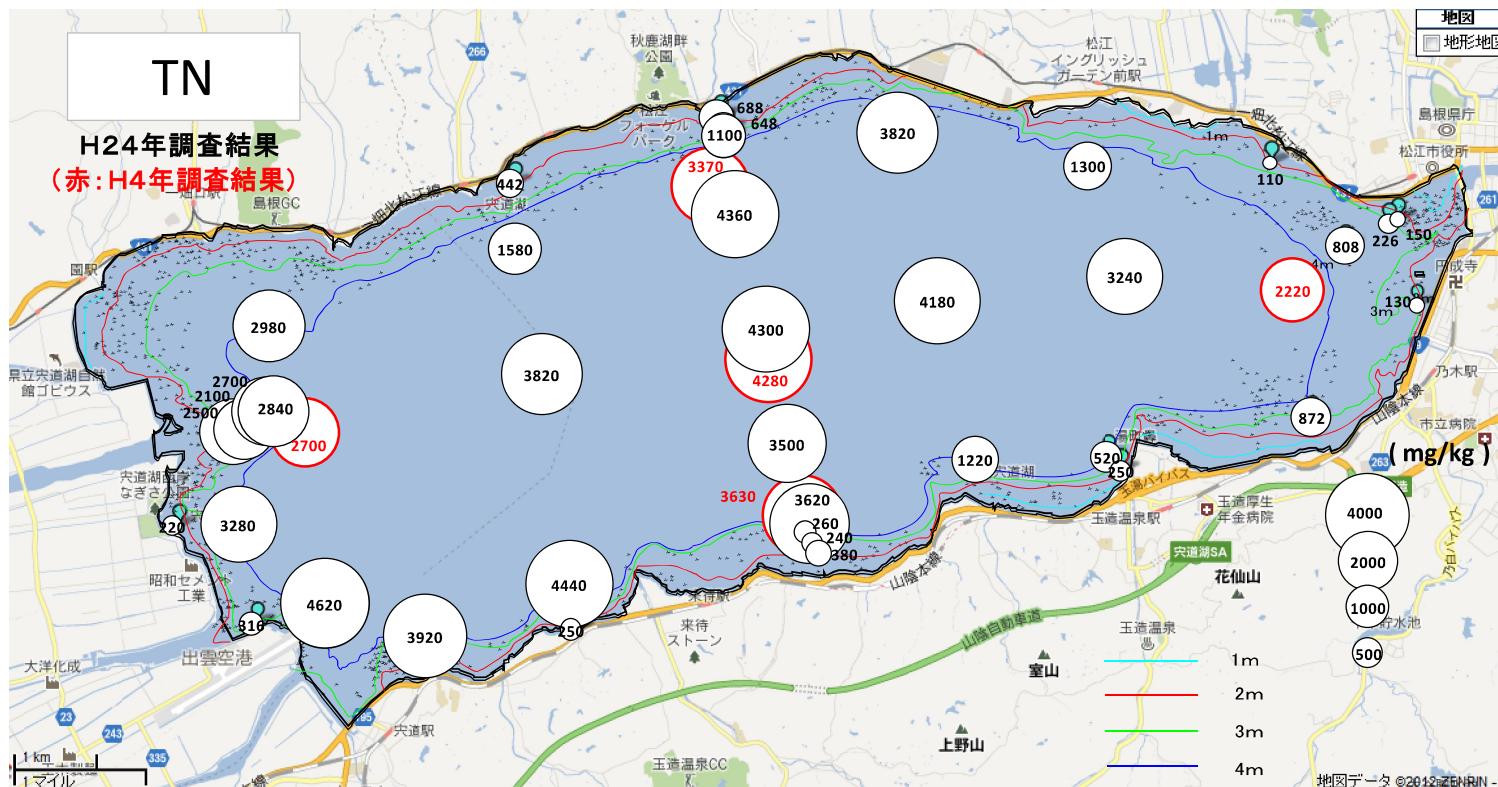
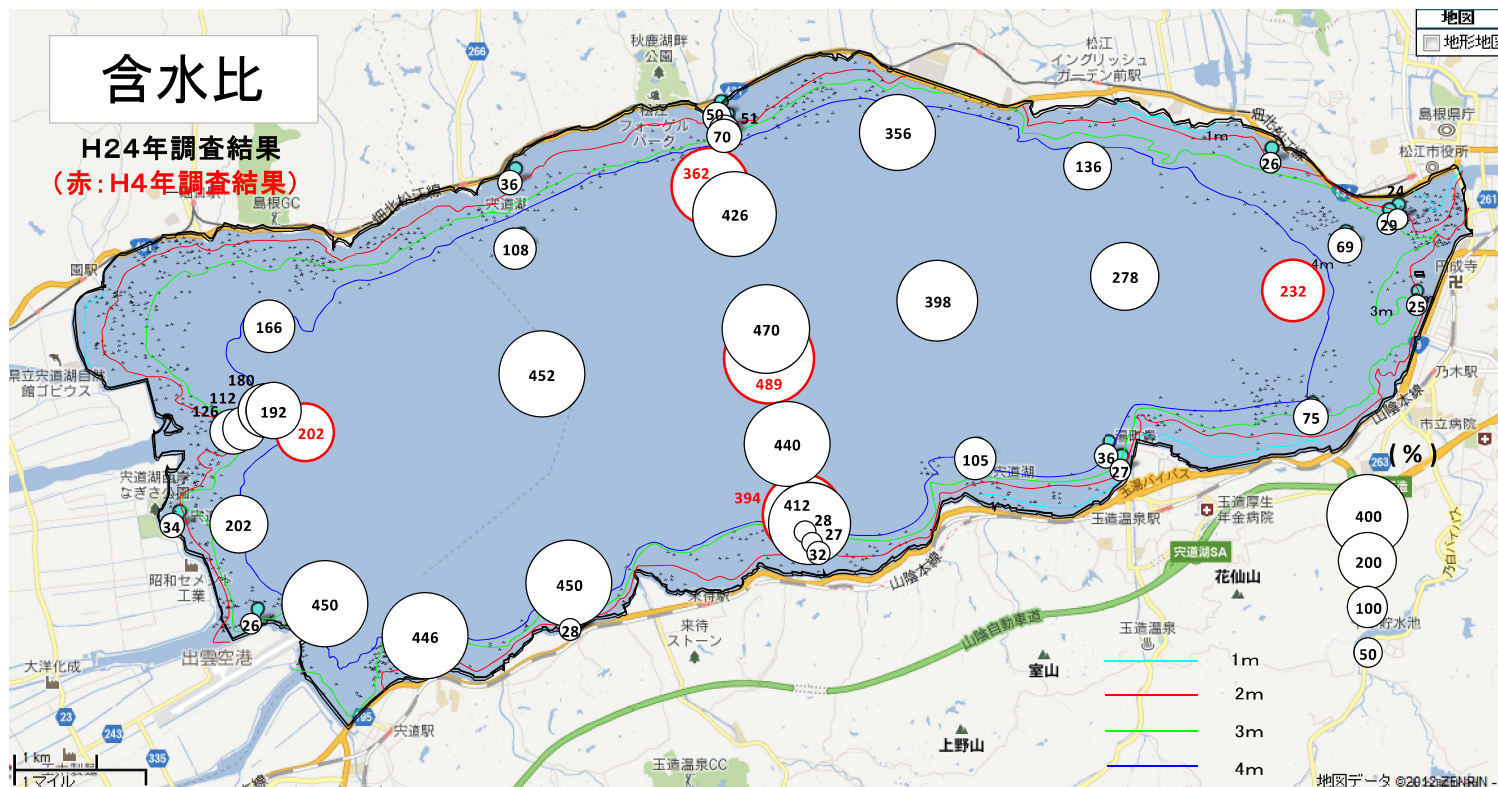
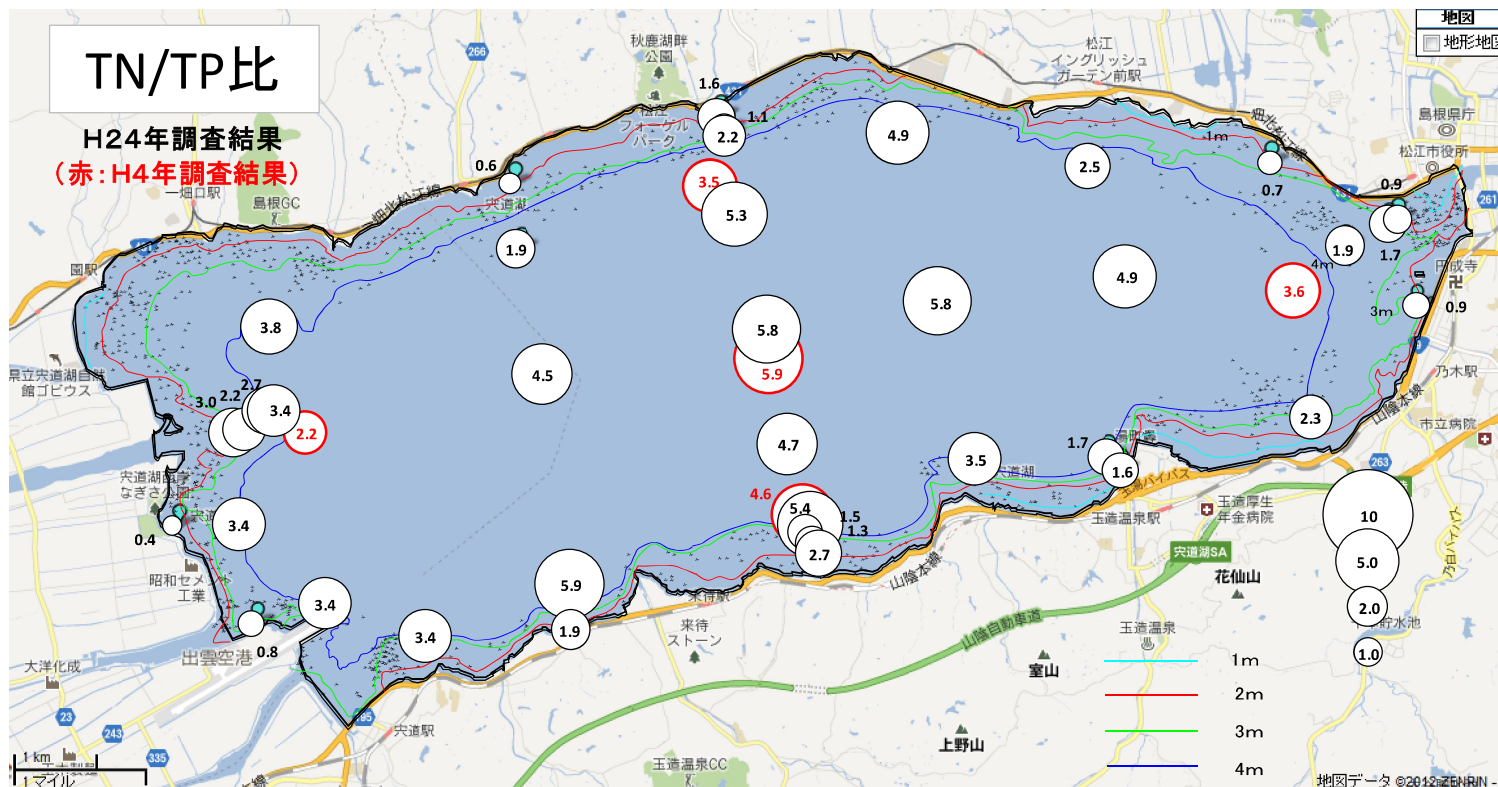








①平面概況把握調査(結果概要:水深4m以上)

	S51年調査	S57年調査	H4年調査	H12年調査	H24年調査	湖心傾向 (H4年比)
調査地点数 (うち4m以深)	86地点 (59地点)	248地点 (163地点)	5地点 (5地点)	100地点 (34地点)	38地点 (24地点)	
シルト・粘土分 (%)	—	12.0～99.9 (96.0)	96～100 (98.4)	4.3～97.4 (75.7)	2.8～99.2 (74.3)	→
強熱減量 (%)	3.8～14.0 (9.4)	3.4～33.9 (14.0)	7.5～12.2 (10.5)	1.7～16.5 (10.4)	1.0～18.6 (10.2)	↗
COD (mg/g)	1.0～20.0 (11.1)	1.9～143? (48.1?)	35～67 (48)	2.2～66.5 (34.9)	1.9～38.2 (20.9)	↓
TN (mg/kg)	—	—	2,220～4,280 (3,240)	—	226～4,620 (2,646)	→
TP (mg/kg)	—	—	620～1,250 (868)	—	134～1,360 (686)	→
含水比 (%)	—	—	202～489 (336)	—	28～470 (249)	→

最小値～最大値
(平均値)

①平面概況把握調査(結果概要:水深4m未満)

	S51年調査	S57年調査	H12年調査	H24年調査
調査地点数	27地点	85地点	66地点	14地点
シルト・粘土分 (%)	—	1.2～99.1 (37.2)	6.3～97.2 (62.5)	0.9～59.9 (12.1)
強熱減量 (%)	0.6～15.1 (4.8)	1.0～34.5 (6.9)	1.0～13.4 (4.7)	0.8～10.0 (2.8)
COD (mg/g)	0.4～15.1 (5.2)	0.9～109? (22.1?)	1.1～51.0 (12.0)	0.9～23.2 (5.3)
TN (mg/kg)	—	—	—	110～2,500 (602)
TP (mg/kg)	—	—	—	130～942 (392)
含水比 (%)	—	—	—	24～126 (45)

最小値～最大値
(平均値)

①平面概況把握調査(面的特性)

各調査年の傾向

○S51年調査

- ・強熱減量、CODは概ね湖心を中心に広範囲に高く、水深が浅いところは概ね低い。

○S57年調査

- ・広範囲でシルト・粘土分は90%以上占めるが、沿岸部はかなり低い。
- ・強熱減量、CODは湖心を中心に広範囲に高く、宍道湖西岸部も高い。

○H4年調査

- ・各地点、各項目を比較すると、湖心部が概ね高い。

○H12年調査

- ・沿岸域でもシルト・粘土分が60%以上となる箇所が多く見られる。
- ・強熱減量とCODは沖に出るほど、西側になるほど高い。

○H24年調査

- ・沿岸域のシルト・粘土分はかなり低い。
- ・概ね水深4mを境に各項目の値が高い。
- ・斐伊川河口付近は水深によらず、各項目の値はほぼ同じ。

傾向まとめ

- ・H4年調査と比較しても、底質の性状に大きな差は見られない。
- ・沿岸部は砂分が多いが、水深4m以上はほぼシルト・粘土で、有機物も多い。
- ・宍道湖全体では大橋川方面は低く、西側の斐伊川方面が全体的に高い傾向。



宍道湖全体の底質環境は、この20年ほとんど変わっていない。

②鉛直状況概況把握調査

調査中

目的: 湖内水質に与える影響の把握(季節変動含む)、過去との比較(鉛直方向)

過去との比較データ一覧

		S53～54年調査	H4～5年調査	H24～25年調査
	調査地点数	18地点	5地点	5地点
	調査時期	5～6月	9月	11,2,5,9月
底質	強熱減量	○	○	○
	COD	○	○	△※
	TN	○	○	○
	TP	○	○	○
	TOC	○	○	○
	含水比	—	○	○
	硫化物	—	○	○
間隙水	NH ₄ -N	—	○	○
	PO ₄ -P	—	○	○

※0～5cmのみ

溶存酸素濃度(現場測定結果)

